



木下杢太郎全集

第七卷

木下李太郎全集 第七卷

第二回配本(全二十四卷)

一九八一年六月一八日 発行

定価 三六〇〇円

著 者 おお 太 田 た ま さ 正 雄 お

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二五五
発 行 所 鐵 岩 波 書 店

電話 〇三―五五―四二〇
振替 東京六二五四〇

印刷・三秀舎 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目 次

京都醫科大學なる友人に與ふる書	一
五足の靴	五
田山花袋氏の「蒲團」	二
東京の河岸	七
「太陽」記者長谷川天溪氏に問ふ	三
淺草觀世音	五
公設展覽會の西洋畫	六
地下一尺錄	四
旅行紀念	六
吾人の小説批評の態度	七
二月の小説	三

「昂」第三號消息	六
三月の雜誌の内より	九
中澤、山本氏等の寫生旅行作品展覽會	一〇
詩集「邪宗門」を評す	二四
日本現代の洋畫の批評に就て	二三
白馬會を評す〔明治四十二年五月〕	三〇
病院生活	一四〇
「屋上庭園」骨牌欄	一四七
淺草公園	一五
市街を散歩する人の心持	一七一
横濱及び異人館情調	一八四
三宅克己先生の洋行を送る	一八
「屋上庭園」卓の一角欄	一九三
藝術の専門化的傾向	二〇

整復の音の感味	二六
白馬會を評す〔明治四十三年五月〕	二三
太平洋畫會を評す	二三〇
外法來	二三七
京阪聞見録	二四五
寫眞版の RODIN とその聯想	二七〇
文部省展覽會西洋畫評	二八三
濱田葆光氏作畫展覽會	三八
夜の思想	三三
海郷風物記	三七
畫界近事	三五六
三新作脚本の實演	三七六
山水と人と	四〇〇
一寸一言	四〇四

繪畫と批評と	四二
島崎藤村の「家」	四七
後記	四三

京都醫科大學なる友人に與ふる書

筍吉君昨日より訪校、正月休暇中郷里にインフルエンザを得、爲めに出京遅延今に及びし由、途中御地に立ち寄りたりとて、色々御地の様子も聞くを得たり、△△は某家に養子にゆきたる趣、一時にして才媛と富貴とを得、羨望に堪へざる哉

僕嘗つて少年時より青年に移るの過渡を極めて興味あるものと思ひしに、近頃更に同輩の青年期の經過を傍見し、並に其僕自身の心中の射影を^{あらた}撿むるに、驚嘆、奇異、羨望、好惡、其他諸^{もろく}の情緒の蜂起すると覺ゆ、君の感ずる所果して如何、

○○が拘留事件は、××の入夫沙汰の如き君既に聞知する所なりき、若し夫れ各人内界の默移に至つては、恐らく君の僕と共に長嘆を禁ずる能^{あた}はざるところならむ、相別る半歳にして已に此^{かく}の如し、驚く可き哉

昨今ゼクチオンに忙殺せられ給ふなる可し、寧ろ赤裸々たるホモ、サーピエンスを祝福せむかな、僕頃日僅少なる解剖學的知識を擁して上野博物館に至り、象(なりしか)の骨骼を見、心中之を人間

の鼻骨、顴骨乃至は上肢、下肢の骨に比較して感慨に堪へざるものありき、ダアキン、ヘツケル、ハックスレー等の學徒は、人間は一哺乳獸なりといふ斷定の、如何にしても打ち消す能はざるに意を得しならむ、

前學期に僕始めてフェルボルンの著書を得しとき、我學ぶ可きところこゝに在るを喜びき、併し又怪しむ所ありき、生理、其他百爾の學は皆これ人間の精神に發するもの唯心理學が此奥宮解明の鍵を握るなりといひ乍ら、近ろ心理學は昔の向下的研究を怪しみて、其基礎を生理學に置かむと力むるが如くならずや、思ふに學問とは任意數概念間の關係を吟味するのみ、根本は問ふ可からざる也、凡てを物理學と化學とに歸納すると雖も人生は依然として舊の人生なり、

近ろ又人間を器械視し、有機體視するの傾向、醫理學界のみならず、文藝其他の方面にも擴まりたるにはあらざるか、我友の文藝にたづさはるものあり、之によりて近時青年の心情如何を卜するを得ば、たとへば文藝の如きも往日は之を以て人間の高尚たる一般的修養なりと考へたるに、今は藝術は人間の一部の精神作用に應じ、之が需要を満すものにして、藝文作者は猶人の需に應じて、或は壁面を裝ひ、或は肉菜を料理する職工、庖人の如しとなす、僕之を精しくせずと雖も文明は分業を生じ、分業は個人を寢へにす、たとへばステフリア、コロナの細胞の、各相俟つて始めて生き得るが如く、個人も亦社會に依りてのみ、始めて全きを得るに至る可きか、少くとも僕等刀圭の道

を辿るものにして、唯自己現在の認識を尊び、幼時の教訓的傳説、或は他の教權^{ひと}他の道德律を情信盲從するを肯^{がへん}ぜざらむか、解剖室^{うち}の裡、累々たる屍體に對して、細胞之れ凡てなり他に何物もあらずと叫ばざるを得ざるならむ、君多分通讀せられしならむ、今年一月新小説の翻譯脚本「父親」の如き、尤も吾徒に入りやすき思想なり。

斯くの如きエスクラツプの子の思想を以て、青年心情推移の時期に會す、老人輩をして殆哉^{たいさい}を叫ばしむる所以也

例へば夫^かの女性の如きも(わが記憶の誤らざらむには)之をゲエテが分ちたるの如く、少時は聖化し、敍情詩化し、後には人化し、散文化す、近時説く所に聽き、人の精神活動を以て、腦髓、筋肉、其他の機關の生理的活動の函數に過ぎずとせば、身體即神^{しん}にして、戀愛も亦性交に於て神聖に、嚴肅に、或は眞にして善なり、一月ホトトギスの所載小説「野分」は(引用誤らざれ)戀愛を以て沈痛たる人生の遊戲となせり、更に進化論的美學に聽き、之を吾徒の立場より解すれば、精力過剰に於ける情交も亦一定の限度に於て、美なる遊戲の一と謂ふ可し、驚かれぬる結論なる哉、肩上げの絲の跡、まだ下着に残これる僕等は、適從する所を知らざる也

然り而して君今や此時を以て山水明媚^{ほとり}の郷にあり、古俗東男西女を賞しき、然り而して君產湯^{うぶゆ}を水道の水に取り、且今寓を加茂川の邊、華潔なる水樓に伍す、甚だ羨むべく而して甚だ危ぶむ可し、

僕の一友近^{ちかこ}ろ秋の京を漫遊して歸れるものあり、西京を以て以太^い利^{たり}亞^やに比す、謂ふは女は美しくして、之を説くは易きを指すなり、鸞^{しづせう}笑の徒に非ざるも、市井深窓の女亦^{ぢよ}甚だ人に厚しと聞く、時正に春に近し君乞ふヴェネチアの街に、美姫をしてECCO IL POETA INGLESE と呼ばしめ、多恨なるシヨーペンハウエルをして一生を厭世の獄裡に呻吟せしめたりと傳ふる才子バイロンの勇俠に則^{のつと}る莫^{なか}れ 呵々 二月十日夜

五足の靴

(九) 平 戸

朝十時佐世保拔錨の汽船に乗つて平戸に向ふ。灣口を出るに當つて今更この港の廣いのに、將た一體九州の海岸の長いのに驚いた。併し此港は、顧みて軍艦の嚴いかめしいのや、起重機の高いのに驚きこそすれ、決してかの出船の甲板に感ずるところの、後ろ髪を牽かれる様な、甘い情緒を起させる所では無い。予等は船尾に陣取つてまどろむで居たら、天幕てんとを漏れる日光が恣ほしに人の背中を刻むで酷烈堪へ難かつた。

暫くにして玄海灘に出た。水は悉く眞鍮の色に黄ばむで、日の下のものなべて虚うつろなるかの感がある。

此船のボーイは愉快な十二三の少年であつた。甲板のスカイライトを指して何といふと聞いたたら、先生ぬからず「ストライキ」と答へた。此少年を捉へて少時船上しばしの無聊を慰めてゐるうち、向ふか

ら瀛船の來るのに遇つた。彼のボーイはスツクと立ち上るや否や、船尾に走つて其處の旗を下げ又上げた。そして一聲「エ、糞ッ！」と叫んだ。膝栗毛の箱根山の雲助の挨拶も思ひ出されて面白い。夫れにも拘らず、瀛船はいかにも鄭重に挨拶したかの様に、鷹揚に擦れ違つて行くさまは一層面白かつた。

平戸には午後二時頃着いた。狭い漁人街れふしまちを通つて直ぐ下島氏を訪問した。案内された書齋は瀟洒として氣持がよかつた。窓から樟の大樹が見える。枝の間には三百年前の開港場が見え透く。殊に庭前には朝鮮から來た酒壺が累々と轉がつて居、室には古い阿蘭陀皿おらんだざらがあるのを見ると、身邊に一種異様の雰圍氣せまいの逼るのを感じるのであつた。また床の間には唐渡りの小さな衝立があつた。黒く塗つた面に、青貝で司馬溫公の家訓が刻むである。此裏を翻すと詩仙雅會の圖があつて、光線の來方で色々な色をあらはす。屢多くの人は、其少年の時に、何處か親類かなんかの家で忤んなものを見るものだ。さうして、そんな事は一切忘れて仕舞つた後になつて、自分の過去に何事かブリリアントな、再び回想すべからざるものがあつた様に思ふて、ひたすらあくがれるものだ。

下島氏に嚮導せられて龜岡神社に登つた。鯨の骨だといふものがあつたが、別に意を引くに足るものではない。それから「阿蘭陀塀」といふものを見た。當時の蘭人が築いたものださうだ。磯石をセメントで繋いだといふが、どうも漆喰しつぐひらしいと其道に深いB生が言つた。漆喰だとすると、三

百年後の今、多少吟味する價值があるさうだ。それから又阿蘭陀井戸だの、阿蘭陀燈臺だのを見た。後者は海に突き出た一角に昔築いた石垣が亂れてゐる許りだけれども之に夕日が燦然とあたる時には、大に畫家の眼を喜ばしむるに足るものがある。

此町を歩いて氣が付いたことは比較的美しい容貌の女が多いことだ。九州に入つてから珍らしいことだから、此町は美人系だなど、興がつたが、唯其顔色グイェントが美しいに過ぎないと思ふ。

夜半に漁船が出るさうだから、米屋といふのに休憩し、夕餉を濟ました。樓は水に臨んで港全體の光景を一望の下に集める。上等兵に成つて歸つたといふ男が銃槍を教へてゐるのを、土地の人の色々な種類が立つて眺めてゐる。夜又散歩して幸橋さいはひばし、阿蘭陀堀に涼風を求て歸つて樓上に假睡した。水の音、船に荷を積込む聲、隣室の喇叭らうぱ節ぶしなどが聞えて、港場みなとばの夜の聲は何となくいゝむみりとして哀れ深い。此港が紀州勝浦に似てゐるといふ人があつたが、自分も如何にもと思つた。暗い中に、黄と赤と青の三燈を掲げた漁船が、物を待つやうに靜かに構へてゐるのが見える。

今日町を歩き乍ら、出来る丈外國語の日本化したのを捜さうとしたが、餘り集らなかつた。昔は長崎に多かつたらうが、文明の傳播の早い今日は、却つて比較的に不便な此地あたりに最も多く残つてゐるらしい。ポーウラ（南瓜）かぼちゃ、コブノエ（蜘蛛の巣）、トツチンギョウ（木の梢）の如きは其二三の例だ。

(十五) 有馬城趾

翌日朝飯を終へてから有馬城の故趾あとを觀にゆく。島原の市街は存外に大きく、較都會やうかいの觀を呈してゐる。街の兩側には清水が流れて川底が見え透く程澄んでゐるが、之が飲料水だと聞くと折角の快感そきなが害はれる。川の中、店の前、車の上、全町到る所に西瓜の多いのには驚かざるを得ぬ。

有馬城は可也おほき大かつたらしい。舊記には原城、丙城ひのえじやうの二箇所に分れてゐたやうに書いてある。今城趾は荒れて悉く桑畑に成つてゐる。畠の中には隨所に石垣には一面に灌木が生ひ繁つて、例の不恰好な中學校、小學校、監獄分監などが其間に立つてゐる。城の石垣には一面に灌木が生ひ繁つて、濠には蓮の花が藤色の臺灣藻の花と雜つてゐる。多くは水涸れて里芋が植ゑてある。

此城を見るものは、誰でも第一に天草四郎のことを想起おもひだすに違ひない。ここは彼が最後に據つて終に滅んだ所である。殊に其戰歿の時が十七歳であると聞いては、何故ともなく一種悲壯の感に打たれる。此一揆の起因は兎に角、之が盟主となつた少年彼の動機、其心理等に至つては、舊記の載する所甚だ尠く、却つて後人の自由なる忖度そんたくの餘地を残してある。自分は天草四郎の事蹟には既に成心を持つてゐる。始めは唯だ想像に過ぎなかつたが、今は必然さうなくてはならなかつた事實の様に思はれて來た。自分は天草四郎を一の天才と見るに躊躇せぬ。そして彼は又其時代の精神に觸

れて……否現時吾等が感じてゐる様な近世的の鬱悶を持つてゐたに違ひないと思ふ。島原軍中話といふ本にも「一揆の大將は天草甚兵衛が子益田四郎時貞といふものなり。幼少より才智人に勝れ、苟且の遊戲にも兎角弓矢を手挟み、木太刀を取りて人に迫合ふことを好む。後習學の功を積まずして才覺双なし、切支丹に深く立入」云々と書いてある。當時九州西部の切支丹の徒は幕府の迫害が烈しくて、廿六年前の夢のやうな識言「當年より廿六年目にあたり善人一人可出生、其者幼なくて諸學を極め天にしるく顯る可し、枯木にも花咲き、山野に旗を立て諸人の首にくるすを立つ可し。東西雲の焼くること近々ある可し。」「デイウス」を尊ぶ時至る可きなり。云々」と信じて、何物をか期待すること、昔の猶太の民のやうであつた。時に森宗意軒、蘆塚仲兵衛、松島伴兵衛、會津元察などの面々、虚か真か、策略か、信仰か、集ひ群りて四郎と天草の民とを煽動した。一方には長崎、平戸の邊から駉々と外國文明が入つて來て、歸來せる漂流者の話、美はしき南蠻國の磁器などは或は此少年の多感なる耳目に詩的憧憬を喚起したかも知ない。女は伽羅の油に髪を結といふ天竺、はた碧眼の美丈夫が皂纒褌に似たる衣を着くといふ、入船出船の阿蘭陀の都に此世の幸を求めに行かうか。此の天下の變に乗じて男一代の名を成さうか、はた莊嚴なる金十字に跪いて彼の世の榮光を味はうか、是等の諸々の妖魔は群ひ來つて彼の身邊を圍繞した。併し彼は最後に誇らしき天命に従つて天草の蒼民の心を救はうと決心した。それから富岡、本渡海峽の邊を轉戦して、終

に此有馬城に據つた。寒島の一少年兵を動かすこと三萬七千餘人、一世の人心を震駭して天下ために騷然、幕府色を失ふ。時に九州諸侯の兵來り圍むもの漸く多く、翌寛永十五年二月廿八日、彼は終に討死したのである。

自分は僅少な史的智識を基にして、此昔を忘れ果てたやうな有馬城趾に色々な舊き姿、象かたちを並べて見た。併し漸く中天に登らうとする土用の太陽は恣に其黄金の矢を投げ注ぐので、人間生活の基本なる「現在の需要」に随つて、懶い足ものうを又西瓜の多い町に運ばねばならなかつた。